

教育、相談、医療拡充を

オンラインゲームなどのやり過ぎで日常生活が困難になる「ゲーム障害」。国内で治療を先駆的に進めているのが国立病院機構久里浜医療センター（神奈川県横浜須賀野市）の樋口進院長。富土川町出身だ。樋口院長に、ゲーム障害の診断基準や治療などについて聞いた。

神奈川で先駆的な治療 樋口院長（富土川町身）に聞く

している。5項目から診断される。同センターでは2011年7月

から「インターネット依存専門外来」を開設。18年度の新規患者数は176人で、約7割が10代の男性。外来患者の90%がオンラインゲームに依存している。治療に当たっては、診察や臨床心理士によるカウンセリング、ゲームから離れ日中に仲間と交流して過ごすデイケア、2カ月間の入院治療などを組み合わせる。ゲーム端末を取り上げることがはしない。「強引に取り上げると、暴言、暴力で反抗することもある。ゲームにアクセスできない環境に身を置いて、リアルな場で人との信頼関係を築く中で、患者自身がゲ

ームは人生の最優先事項ではないことを自覚することが一歩」という。アルコール、ギャンブルなどの依存症治療に取り組んできた樋口院長は、ゲーム障害は「すべての依存の中で治療が最も難しい」と話す。同センターの患者で最年少は小学2年生（7歳）。「子どもは昼夜逆転や不登校など、ゲームによる深刻な影響が理解できず、治療を継続するのが難しい」と話す。同センターでは治療開始時、血液検査や骨密度の測定、心理検査

などを実施。骨密度の低下や眼精疲労のほか、血栓ができるエコノミークラス症候群の初期症状が見られるケースもある。ゲーム障害の身体への影響を数値的にも把握

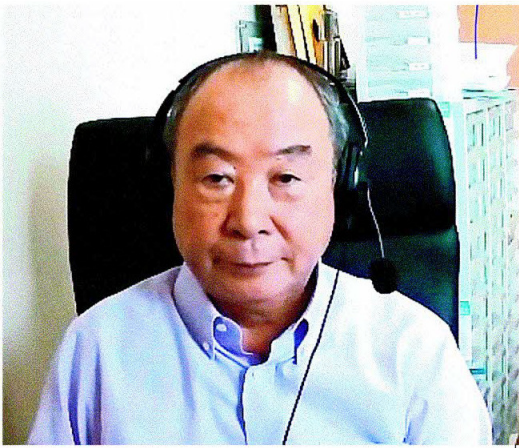
してもらい、治療の必要性を伝える。樋口院長によると、ゲーム障害の背景には、感情のコントロールが難しい注意欠如多動性障害や、対人関係が苦手な自閉症スペクトラム障害の特性が見られることが多い。「現実の世界で対人関係がうまくいかない社交不安や、発達障害などによる生きづらさを抱える中、ゲームにのめり込み、バーチャル世界で知り合った仲間と評価されることで自尊心を満たす子もいる。ゲーム以外に没頭できるものを本人に示し、視野を広げながら、心に併存する問題も一緒に治療していくことが求められる」と話す。

香川県は4月、ゲームやスマホの使用時間の目安を定めた「ネット・ゲーム依存症対策条例」を施行。消費者庁は全国の消費生活センターの窓口機能を強化し、相談者を医療機関などにつなぐ相談体制の整備に乗り出した。

樋口院長は、通信環境が整い、スマホで手軽にゲームが楽しめる今、「学校などでの予防教育や、相談体制の整備、治療体制の拡充が急務」とした上で、「ゲーム障害はひきこもり、退学、学力低下など、子どもの将来や人生に深刻な影響を及ぼし、出口が見えない現状に苦しみ『死にたい』との思いを抱く子どももいる。家庭で利用のルールを決め、両親が使い方の手本を示すことも重要だ」と話している。

樋口院長は、通信環境が整い、スマホで手軽にゲームが楽しめる今、「学校などでの予防教育や、相談体制の整備、治療体制の拡充が急務」とした上で、「ゲーム障害はひきこもり、退学、学力低下など、子どもの将来や人生に深刻な影響を及ぼし、出口が見えない現状に苦しみ『死にたい』との思いを抱く子どももいる。家庭で利用のルールを決め、両親が使い方の手本を示すことも重要だ」と話している。

樋口院長は、通信環境が整い、スマホで手軽にゲームが楽しめる今、「学校などでの予防教育や、相談体制の整備、治療体制の拡充が急務」とした上で、「ゲーム障害はひきこもり、退学、学力低下など、子どもの将来や人生に深刻な影響を及ぼし、出口が見えない現状に苦しみ『死にたい』との思いを抱く子どももいる。家庭で利用のルールを決め、両親が使い方の手本を示すことも重要だ」と話している。



樋口進院長（富土川町出身）

スマホで手軽にゲームが楽しめる今、「予防教育や相談、治療体制の拡充が求められる」と話す樋口進さん

世界保健機関(WHO)が定めるゲーム障害の定義

- ゲームをしたい衝動をコントロールできない
- ゲームが生活の最優先事項になっている
- ゲームにより問題が起きている
- 学業、職業、家庭生活などに明確な問題が起きていてもゲームをやめない
- 上記の4項目が12カ月間継続している（上記の症状が確認され、重症である場合は期間は短くても診断はできる）

ひぐち・すすむさん 1954年飯沢町（現富土川町）生まれ。甲府南高、東北大学医学部卒。独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター院長。依存症対策全国センター長、WHO研究・研修協力センター長も務める。

〈戸松優〉